



『インディアスの破壊についての簡潔な報告』

ラス・カサス／染田秀藤訳 改版 岩波書店／岩波文庫

本館	請求記号：X/080/195B/Cas	資料ID：701346868
神田分館	請求記号：X/080/195B/Cas	資料ID：701356065
Knowledge Base	請求記号：/255/C25	資料ID：111039335

国際コミュニケーション学部教授 井上 幸孝

1552年に印刷された小冊子の邦訳。日本語訳の初版は1976年だが、2012年に改訳新版が出され、解説も大幅に充実したものとなった。

著者バルトロメ・デ・ラス・カサス（1484-1566）はスペイン出身のドミニコ会士で、大航海時代の只中にこれを書き綴った。スペインがアメリカ大陸に領土を拡げていく中、現場で起きている現実を本国に伝えようとした書だが、その衝撃的な内容ゆえに他のヨーロッパ諸国による反スペイン・キャンペーン（「黒い伝説」）にも利用された。

ここに描写されている出来事の多くは、しばしば読むに堪えない内容である。けれどもそれこそが征服・植民地化の進むアメリカ大陸で起きている現実だった。16世紀のスペイン人征服者（コンキスタドル）たちが遠く離れた地で引き起こしていた惨状の単なる「告発」と本書を見なすのは過小評価だろう。アメリカ先住民の人としての権利、ひいては人類の平等を見据えたラス・カサスは、同時代の価値観にとらわれず、未来を視野に入れることのできた思想家だったと言ふべきなのかもしれない。

昨今の世界では、あちこちで強権的な政権が幅を利かせ、ときに言論の自由が危ぶまれている。私たちが住む日本や現代世界にも、ラス・カサスが見せたような勇気を、そして未来まで視野に入れた展望を示すことのできる人は果たしているのだろうか。